

- ✦ 親日国モンゴルと日本
-モラロジーの視点から 清水武則
- ✦ 倫理道德が届かない実社会 徳川文武
- ✦ コロナ時代に師として継承すべきこと 近藤北濤
- ✦ オンライン授業から見えてきたもの 宮下和夫
- ✦ 地域の人とともに育てる
子どもたちの道德心 長澤勇哉
- ✦ 学校のちょっといい話 鍵山智子
- ✦ 鼎談シリーズ②「響育」 長門俊介・山川達也・大久保俊輝

教育応援誌

けいいく

知徳一体の啓発教育をめざして

子どもから高齢者まで楽しめる博物館

東京国立博物館長・元文部科学事務次官 銭谷 眞美

日本には約五七〇〇館の博物館があります。私は、あらゆる年代の方、特に学校教育段階の子どもや高齢者の方に博物館を楽しんでいただきたいと思っています。

三〇年程前、ワシントンでの国際教育大臣会合に出席する文部大臣に随行したことがありました。会議の合間に折から同地の美術館で開催していた日本美術の展覧会を見学しました。縄文土器、はにわ、仏像、浮世絵など我が国を代表する名品を目の当たりにすると文部大臣は「これは教科書で見た」と賛嘆の声を発して楽しまれました。

その時私は、小さい頃学校で学んだことはいくつになっても忘れないものだと感じました。子どものころは記憶力に優れ感受性も強いと言われます。博物館の世界では、「十一歳」がキーワードになっています。つまり、小学五年生前後、小学校中学年から中学生にかけて、博物館などで優れた美術品や珍しい

品々に出会ったり、音楽、演劇などの本物の舞台芸術、崇高な自然現象などに接すると記憶や感動がいつまでも心に残り、情操を豊かにし感性をみがくと考えられています。

私自身、六〇年前、小学校六年生の時に秋田大学鉱山博物館で体験した鉱山や地殻活動の展示に魅了された時の感激は今日まで鮮明に残っています。

一方、今日人生一〇〇年時代と言われると。長寿化が進む中で健康寿命の期間を延ばすことが必要とされています。

博物館では「回想法」という鑑賞法が導入されはじめています。これは高齢者の方に、昔子どものころ使っていた生活用品や台所用品、各種の道具、なつかしい写真などを見たり触れたりしていただきながら、それらにまつわる思い出や経験などを語り合っていたりいただくものです。高齢者の皆さんが生き生きとお話しされるそうです。

老いも若さも「また来たい」と思える博物館を目指したいと思っています。

「博物館へのGO-」対談

<https://www.morality.jp/educatorseminar/moral-education/>

(東京国立博物館)



銭谷 眞美氏

